

た。若者は、「ああ、何と不思議な美しい薄絹の衣であろう。このような着物はいまだかつて見たこともない。」と、独り言を言いながら、「そうだ、家に持ち帰って、母様に見せてあげよう。どんなにか喜ぶことだろう。」と思いつながら、美しい衣を松の枝から静かに取りはずし始めました。

弁天様は驚いて、「それはなりません、私のもの。人様にはご用のない、天女の羽衣なのです。どうかお返しく下さい。」と、身を隠しながらも思わず声をあげてしまいました。

若者は突然のことにびつくりしましたが、羽衣と聞いてさらに驚き、よけいに天女の羽衣とやらがほしくなってしまうました。そして、

「羽衣ならば家に持ち帰って、我が家の宝物にいたしたいと思えます。」と言ひ出しました。弁天様は若者に泣き寄りたくも思いましたが、裸であることにはつとして、立つ事も動く事も出来ず、たださめざめと泣くばかりでした。このような事が半時はんじほども続いたでしょうか。さすがに若者も可哀想かわいそうになつてきました。それで、「あなたがまことの天女なら、天女の舞を舞うことができるはずですね。もし、その舞を見せていただけるのなら、お返ししてもいいですよ。」と問いかけました。

弁天様は、それはありがたい事と何回もお礼を述べました。乾きあがつた衣を返してもらい、元のように着飾つて、また幾度もお礼を述べらうちに、天女は静かに地上から離れると、風に和し、透き通る花がさざめくように揺れ舞いつつ、その姿は大空に高く昇つていきます。その道筋には満天の虹がかかり、辺りの山野にはまばゆいほどの七色の輝きが映りました。「みちのくの東遊あずまあそびび」の曲の調べに乗せて、聞いたこともない不思議な笛の音や琴鼓きんこの音が春の雲に広がり、天女の舞うあでやかな姿は次第に高く大空に舞い昇り、やがて、霞の中を遠く木幡の弁天山に消えたということです。